

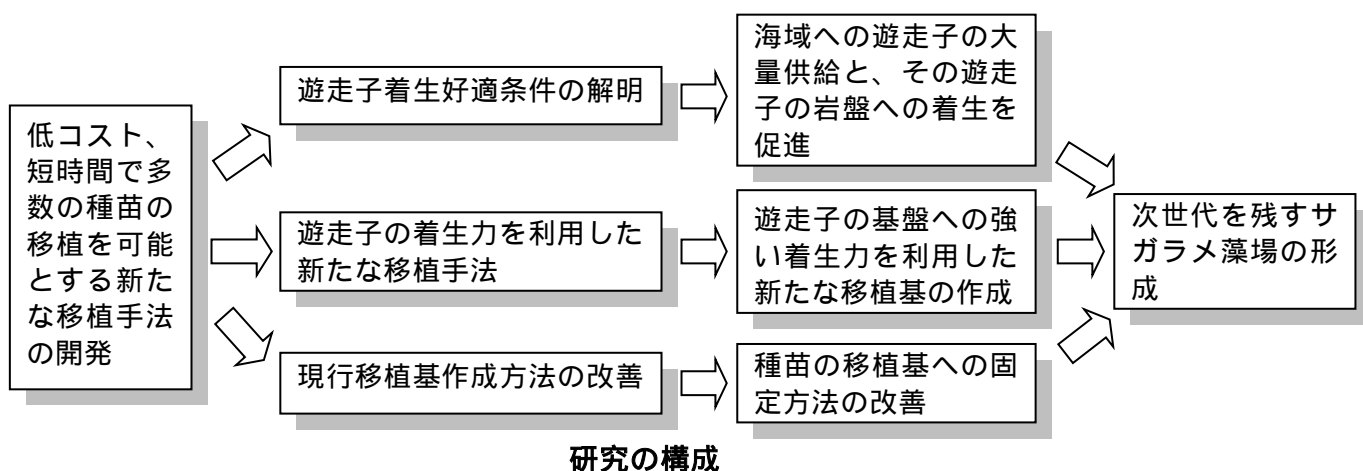
榛南海域の大規模藻場造成に向けたサガラメの移植方法の開発

(予算区分 県単独 研究期間 平成27～28年度)

担当：深層水科 永倉靖大

【研究の背景とねらい】

- ・ 県では沿岸漁場整備実証事業により、榛南海域に藻場の復元を目指して種苗の移植事業を続け、カジメの藻場を135haまで回復しました。
- ・ 一方で、地域特産種であるサガラメは、藻食性魚類による食害が藻場回復の障害となっています。県では今後、サガラメ移植事業の規模を拡大し、食害に耐えて自立して次世代を残す、サガラメ群落拡大の元となる藻場の形成を図ることを計画しています。
- ・ 水産技術研究所では、サガラメ群落の回復を図るための基礎的研究を行い、榛南海域の環境を考慮した、低コスト、短時間で多数の種苗の移植を可能とする新たな移植手法を開発し、それを基に、食害に耐え次世代を残す藻場を実現する移植計画を策定し、サガラメ藻場の回復を目指します。



【期待される効果】

- ・ 遊走子を用いた新たな移植手法の開発と現行の移植手法の改善を行い、それぞれの優位性を比較し、低コスト、短時間で多数の種苗移植が可能となる最適な組み合わせを提案します。
- ・ サガラメの移植とその後の観察を担う水産振興課と連携し、本研究の成果を活かして、次世代を残す藻場を実現する藻場設置モデルの構築や、それを基にした移植計画を策定することで、相良と御前崎のそれぞれの海域にサガラメ藻場を回復します。

【年次計画】

細目課題名	研究期間	細目課題の内容
1. 遊走子着生の好適条件解明によるサガラメ群落形成促進技術の開発	27～28	遊走子着生の好適条件の解明、及び海域への遊走子の大量供給と岩盤への着生促進
2. 遊走子の着生力を利用した新たな移植方法の開発	27～28	遊走子の基盤への強い着生力を利用した新たな移植基の作成
3. 現行移植基作成方法の改善	27	種苗の移植基への固定方法の改善

(作成 平成27年3月)